

携帯・ネット依存とIPT（対人認知課題）の関連について（2）

飯塚 一 裕（障害児教育講座）

要約 本研究では、携帯・ネット依存と、IPT（Interpersonal Perception Task：対人認知課題）から見た社会的感受性との関連を再検討した。その結果、男性は依存性とIPTとが有意な負の相関となり、女性は両者の間に相関は見られなかった。依存性とIPTの性差は有意となり、両方とも女性の方が高いことが明らかになった。また、ネットなどの利用状況の自由記述をテキストマイニングによって検討した。全般的に見て、電子機器によるコミュニケーションについて普段から好意を持って使用している状況が表れていることが示唆された。

キーワード：携帯・ネット依存，IPT，社会的感受性，テキストマイニング

1. 問題と目的

内閣府によって実施された「青少年のインターネット利用環境実態調査」では、小学生・中学生・高校生における携帯電話やパソコンの所有率、携帯電話等によるインターネットの利用率が明らかになっている。携帯電話等を使用したインターネットの利用率は、小学生では40.8%、中学生では75.3%、高校生では95.4%となっている（内閣府，2013）。高校生ともなれば、ほとんどが携帯電話を所有し、インターネットを利用している。インターネットは我々にとって身近な存在となっているが、その普及に伴い、様々な問題が指摘されている。

例えば、インターネットが子どもの暴力を喚起する懸念も出されており、インターネットを使いたいじめなどは社会的な注目を集めている（坂元，2012）。また、使い過ぎによる依存・中毒の問題も大きく、携帯・ネット依存と心身の諸問題との関連性について多くのことが言われている。樋口（2013）によれば、身体の問題として、視力の低下、頭痛、めまい、吐き気、肩こり、腱鞘炎などの訴えがあるとされる。また、親や友人とうまく付き合えない、学校や職場へ行かなくなるなど、社会とのかかわり方について自分でコントロールできなくなる状態になるといった心の健康問題も指摘されている。さらに、うつ病などの精神疾患がネット依存の背景にある場合もあるとされる（樋口，2013）。

Bugeja（2005）は、コミュニケーションを電子機器に依存しすぎることによって実際の人間関係、コミュニケーションがうまくいなくなる傾向があると述べている。飯塚（2013）は携帯、ネット依存性の高い男性は、非言語的的感受性、社会的感受性を示すIPT得点が低い、女性については相関がないことを見出した。本研究では、参加者を増やして、更に携帯・ネット依存とIPT（対人認知課題）でみた社会的感受性との関連を再検討することを目的とする。

次に本研究では、インターネット利用の自由記述をテキストマイニングによって検討するため、学生たち

のネットなどの利用状況について調査を行う。利用状況の自由記述に関して、使われている単語という側面などをテキストマイニングイメージで分析する。

2. 方法

参加者：大学生 488名（男子学生 206名，女子学生 282名）

手続き：

対象となる大学生に対して、ケータイネット依存のチェックリストとIPTを教室で集団的に実施した。

また、101名の学生に携帯やネットへの利用状況を次のような質問で自由記述を求めた。

「あなたのコミュニケーション手段—ケータイ、メール、フェイスブックなど—の利用状況について述べて下さい（どの程度、頻繁に使用しているかなど）」

自由記述を行った101名のうち、男性は49名、女性は52名であった。

1) ケータイネット依存のチェックリスト

魚住（2005）は8項目よりなるゲーム、ネット依存のチェックリストを作成している。これはゲームネット依存の簡単なスクリーニングテストである。本研究では飯塚（2013）に引き続き、ゲームをケータイに置き換えて使用した。

項目は以下の通りである。

- ①ケータイやネットができないことで、イライラしたり、落ち着かなくなる。
- ②家族や友人と過ごすよりも、ケータイやネットを優先することがある。
- ③ケータイやネットに熱中しすぎて、学校（仕事）のことがおろそかになったことがある。
- ④時間を決めてやろうとして、守れなかったことがある。
- ⑤やりすぎて、夜が遅くなったり、朝が起きられなくなったことがある。
- ⑥していることをごまかしたり、ウソをついたことが

ある。

⑦やりすぎて、手や目や頭や腰などが痛くなったり、体調が悪くなったことがある。

⑧止めさせようとしたら、怒り出したり、暴言、暴力になったことがある。

各項目について、よくある、時々ある、あまりない、全くない、の4段階で答えてもらい、よくある、を2点、時々ある、を1点として合計得点を求め依存症スコアとした。時々あるが1項目でもあれば要注意、4項目以上つまり得点が4点以上を依存レベルと判定した。

2) IPT

IPTの教示は以下の通りである。

「これから見てもらうビデオは人々が他者の行動の印象をどのように形成するかを調べる目的で作られたものです。いろいろな人間関係の場面を15ほど約20分間見て頂きます。各場面についてそれぞれ1つの質問が提示されるのでこの質問に対する正しい答えを選択肢から選んでください。一つ一つの場面を全部見終わってから回答してください。場面と場面の間は約6秒間です。」

なお、質問項目は以下の通りである。

- ① 2人の大人の子供は誰ですか。
- ② 男性と女性はどういう関係ですか。
- ③ この2人は同じ職場で働いています。上司はどちらですか。
- ④ 同じ女性が2つの場面に現れます。どちらが嘘をついていて、どちらが本当のことを話していますか。
- ⑤ 1対1のバスケットボールの試合で、どちらが勝ちましたか。
- ⑥ 男性と女性はどういう関係ですか。
- ⑦ 自分の上司に話しているのはどの場面ですか。
- ⑧ ラケットボールの試合でどちらが勝ちましたか。
- ⑨ 2人の女性は、それぞれ誰に向かって話していますか。
- ⑩ どちらが嘘をついていて、どちらが本当のことを話していますか。
- ⑪ この2人は同じ職場で働いています。上司はどちらですか。
- ⑫ フェンシングの試合でどちらが勝ちましたか。
- ⑬ 女性は電話で誰と話していますか。
- ⑭ 2人の子供の父親はどちらですか。
- ⑮ どちらが嘘をついていて、どちらが本当のことを話していますか。

3) 自由記述の分析

質的データ解析はText Mining Studio 3.0（数理システム）を用いテキストマイニング手法で分析した。自由記述から得られたテキスト型データを、まず単語

に分け、分かち書きし、構成要素を抽出し分析した。

3. 結果

1. IPTの性差、依存性の性差を検討した。これによるとIPTについて男女の差は有意であった（男性： $M = 7.98, SD = 1.89$; 女性 $M = 8.33, SD = 1.77, t(486) = 2.123, p < .034$ ）。また依存性についても男女の差は有意となった（男性： $M = 3.15, SD = 2.35$; 女性 $M = 3.60, SD = 2.56, t(486) = 1.995, p < .047$ ）。

2. 依存性とIPTとの相関をピアソンの相関係数によって算出した。 $-.042$ となり有意な相関ではなかった（ $p < .35$ ）。次に男女別の相関係数を算出した。男性については依存性とIPTとの相関係数が $-.230$ となり有意な負の相関となった（ $p < .001$ ）。しかし女性については $.076$ となり両者の間に相関は見られなかった（ $p < .202$ ）。

3. まず、自由記述にどのような単語が多く出現しているかを見るために、単語頻度解析を行った（図1）。男女を合わせて最も頻度の多い単語は、「利用」、「メール」、「フェイスブック」、「ツイッター」、「ライン」、「ケータイ」、「自分」などの単語が多く出ていることがわかる。

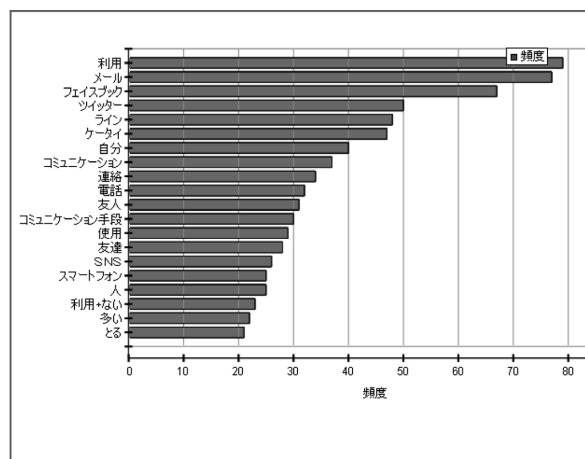


図1 単語頻度

次に、係り・受け関係における単語同士の関係を見つめる。図2は自由記述の中に表れている、係り受け表現について、係り元単語と、係り先単語の頻度を求め、データを2次元上に配置してみた結果である。これを見ると、関連のあるものが、近い点に配置されている。「コミュニケーション手段として必要不可欠」などのメッセージが読み取れる。

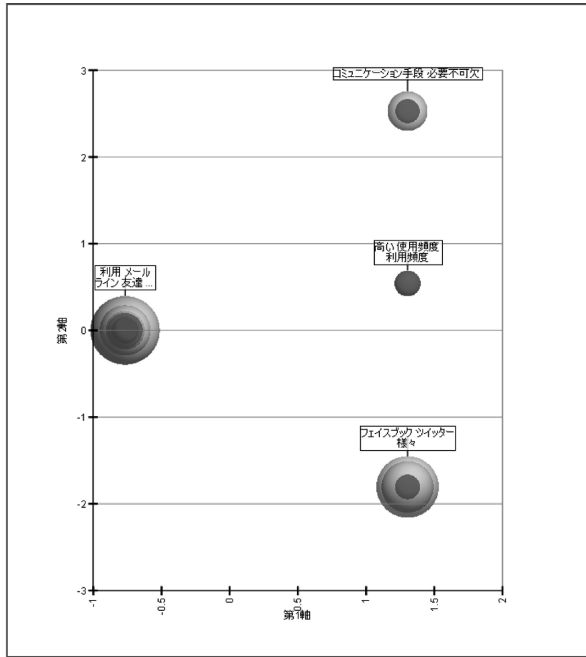


図2 係り—受けの関係

次に、良いイメージで語られている単語、悪いイメージで語られている単語を調べてみた（評判抽出）。これは、単語に対して好意的な表現や非好意的な表現それぞれ語られた回数をカウントし、それをもとに、好評語・不評語のランキングを作成する。つまり単語に対して、好意的な表現、否定的な表現、それぞれで語られた回数を数え、それをもとに単語の、肯定度、否定度の順位を表した（図3）。メール、コミュニケーションなどが肯定的にみられ、セキュリティ面、人間関係、気持ち等の語は否定的に見られている。つまり、自分の気持ちを伝える時などには電子機器の手段は使用せず、個人情報を書き込まないように注意していることが窺える。

対応分析によって、単語による男女の関係を2次元上に配置したのが図4である。男性（女—男）と女性（女—女）それぞれに特徴的な語群に分かれていることがみてとれる。

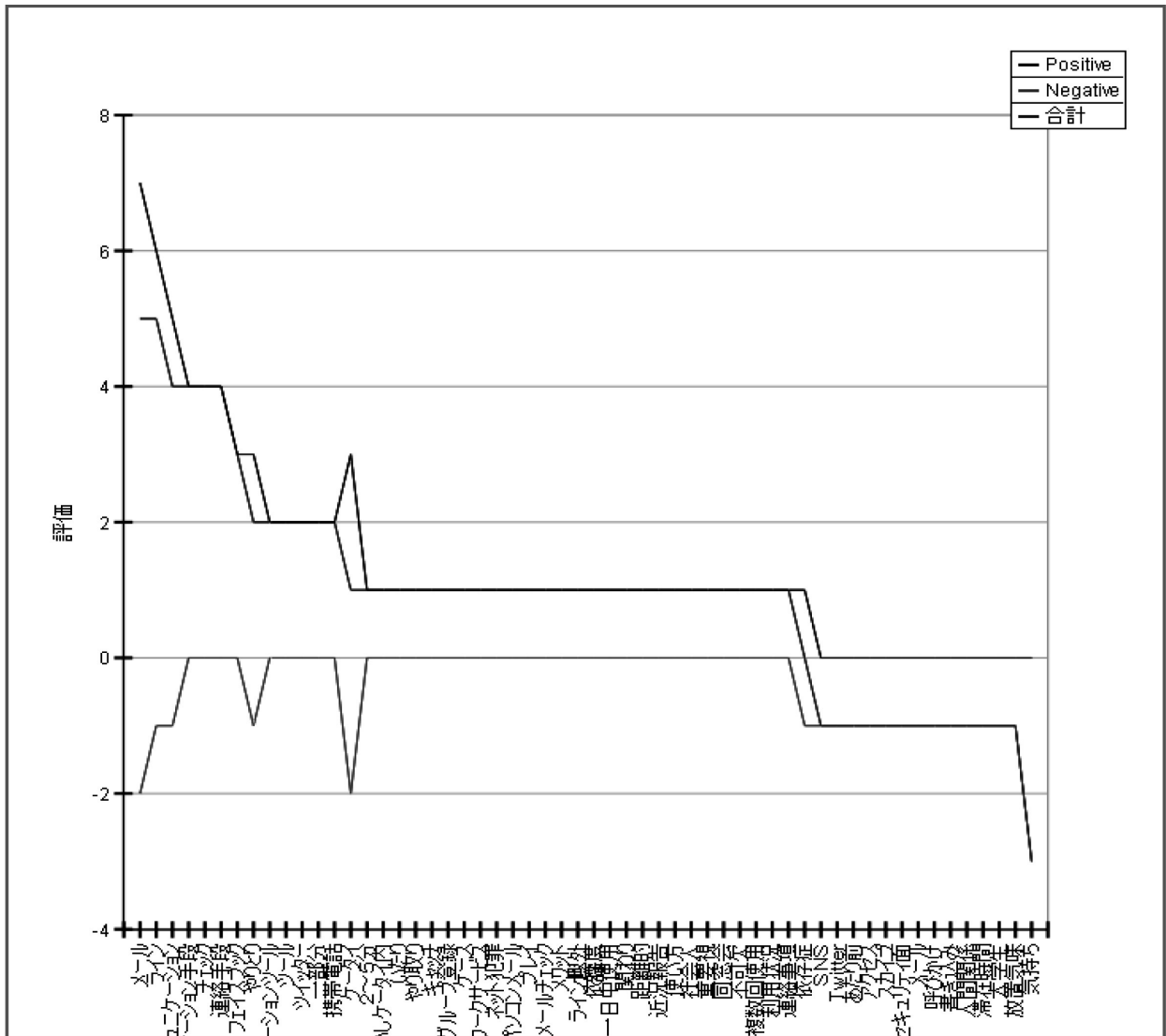


図3 好評語・不評語

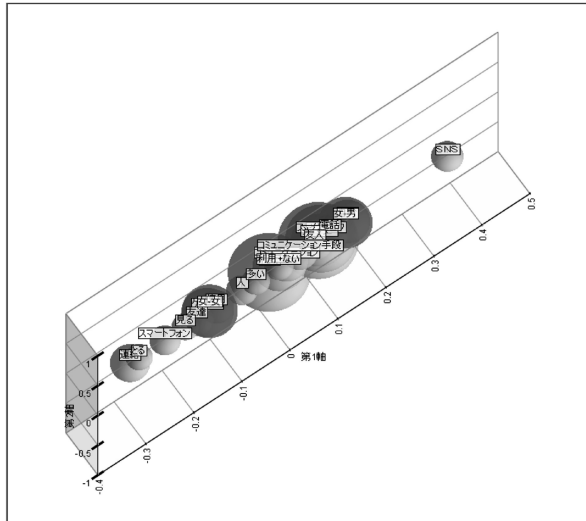


図4 対応分析

次に、男女別に、特徴的に出現していた単語を抽出してみた。まず男性は、「SNS、メール、フェイスブック、…」(図5) などであり、女性は「連絡、近況、ケータイ…」(図6) などが特徴的であると言える。

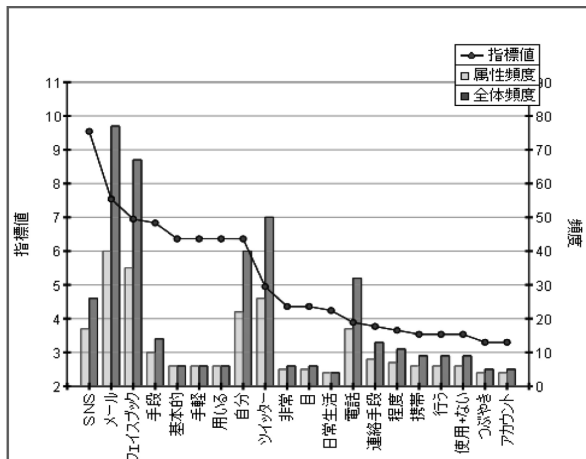


図5 男性の特徴語

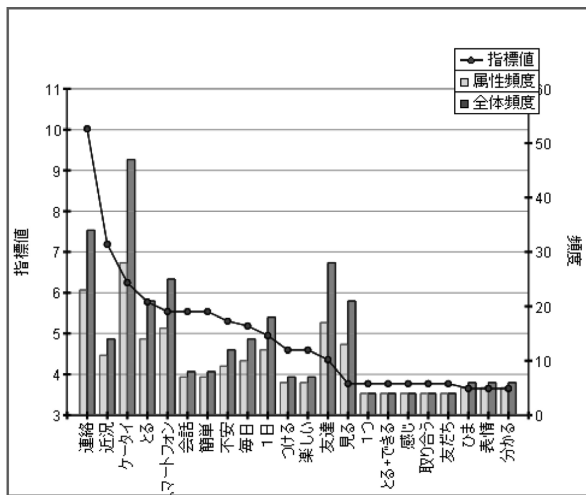


図6 女性の特徴語

4. 考察

依存性について男女の差が有意となり、女性のほうに依存性が高くなっている傾向がみられた。樋口(2013)は、中高生の男性の6.4%、女性の9.9%、あわせて8.1%がネット依存を強く疑われる状態にあり、その数は約52万人と推定されると述べている。

次に、IPT得点については性差が報告されている。一般に女性の方が男性より得点が高いとされている(Constance & Archer, 1989; Smith, Archer & Constance, 1991)。Iizuka et al., (2002)も女性が男性より得点が高くなったことを報告している。Hall(1985)は、非言語行動の解釈研究展望の120のうち80%が非言語的的感受性は女性の方が高いとしている。本研究でも性差が見られ、非言語的的感受性は女性の方が高くなっていた。

男性については依存性とIPTとの有意な負の相関となった。つまり、携帯やネットへの依存度が高い者は非言語的的感受性、社会的感受性が低くなっていた。しかし女性については、両者の間に相関は見られなかった。つまり、携帯やネットへの依存度と非言語的的感受性、社会的感受性との間には関連がないという結果になった。依存性とIPTとの関連性の性差に関する研究はほとんど見あたらない。依存性とIPTとの関連性の性差が何を意味するかは、更に今後の研究を待たねばならないだろう。

関連する作業遂行の性差について以下のような説がある。男女とも、地図上でレストランを探しながら、架空のなくした鍵を見つけるならこうするという方法を紙に描きながら、簡単な算数のパズルを解いてもらう(時間は8分間)。結果は女性被験者の方が男性被験者より良かった。女性は楽々とこれらの作業を一度にこなしていたが、男性は「なくした鍵を探す」作業で一様に面食らっていた。この結果から、女性はたの作業をやりくりしながら、ものごとを少し離れた視点から客観視したり、考えをめぐらせたりすることが、得意であることが示されている(キース・ローズ)。また、女性の脳は一度に複数の課題に集中できるように作られている。女性はテレビを見ながら電話で会話しながら新しいレシピを見ながら料理を作ることが出来る。しかし、男性の脳は同時に複数の作業に集中できるようには作られておらず、男性はテレビを見ながら電話に集中することは難しい。

次に、電子機器によるコミュニケーション利用の状況をテキストマイニングによって分析する。男女を合わせて最も頻度の多い単語は、「利用」、「メール」、「フェイスブック」、「ツイッター」などであった。利用状況を訪う質問であり、これらの言葉が上位に来るのはうなずける。

全般的にメール、コミュニケーションなど良いイメ

ージで語られている単語が、非好意的なイメージで語られている単語よりも多いことは注目値する(図3)。これは、大学生達は電子機器によるコミュニケーションを全般的にみて好意を持って頻繁に日常使っている状況が表れているようである。しかし、セキュリティ面、人間関係、気持ち、等の語は否定的に見られている。つまり、自分の気持ちを伝える時などには電子機器の手段は使用せず、個人情報を書き込まないように注意している、などのように電子機器のコミュニケーション手段を全面的に肯定しているわけではないことも示されている。

男女別に、特徴的に出現していた単語を抽出してみた結果、男性は、「SNS、メール、フェイスブック、…」などであり、女性は「連絡、近況、ケータイ…」などが特徴的であった。女性は連絡を取り合ったり、近況報告などをケータイで行うというプライベートな利用が特徴であると言えよう。男性は、SNS、メール、フェイスブックなどの趣味的な利用が特徴的であるかもしれない。

付記) 本研究の計画及び実施にあたり、飯塚雄一氏(島根県立大学)に助言を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

引用文献

- Archer, D. (1980). *How to Expand Your S.I.Q.* New York: M. Evans and Company. (工藤力・市村英次(共訳)(1988) ボディ・ランゲージ解読法 誠信書房)
- Bugeja, M. (2005) *Interpersonal Divide* Oxford: Oxford University Press.
- Consatanzo, M., & Archer, D. (1989) Interpreting the expressive behavior of others: The interpersonal perception task. *Journal of Nonverbal Behavior*, 13, 225-235.
- Consatanzo, M., & Archer, D. (1993) The interpersonal perception task-15 (videotape).
- Hall, J.A. (1985) Male and female nonverbal behavior. In A.W.Siegmán & S. Feldstein (Eds.), *Multichannel Integrations of nonverbal behavior* (pp.195-225). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- 樋口進(2013) ネット依存症 PHP新書
- Iizuka, Y., Patterson, M., & Matchen, J.C. (2002) Accuracy and confidence on the interpersonal perception task: A Japanese-American comparison. *Journal of Nonverbal Behavior*, 26 (3),159-174.
- 飯塚一裕(2013) 携帯・ネット依存とIPT(対人認知課題)の関連について 障害者教育・福祉学研

- 究 第9巻, pp.1~5
- 内閣府(2013) 平成24年度青少年のインターネット利用環境実態調査報告書
- 坂元章(2012) インターネットと子どもの暴力 教育と医学 第60巻10号, pp.88~95
- 数理システム Text Mining Studio 操作マニュアル (v.3.0)